

蝶の博物詩

生態13

蝶の天敵 クモ(2)



アズチグモに捕らえられたイシガケチョウ
(2005年12月3日 竹富島)

photo by

Nishiyama



アズチグモ
(2006年3月24日 石垣島)

蝶の博物詩

生態13

蝶の天敵 クモ(2)

わが家の浴室に脚の非常に長いクモが住んでいて、夜間、台所や居室にまで姿を現わす。名は定かではないが、アシダカグモであろうか。黒く、小さな幼時は可愛いが、長じて脚を伸ばすと10 cmほどとなり、8個の眼玉で見つめられると無気味である。夜、徘徊して、ゴキブリを食すという話なので居候させている。ゴキブリを捕えた現場をみたことはないが、噴霧殺虫剤もなく、スリッパで追い回す運動能力も低下したわが家では強力な味方である。もっとも個人的にはクモよりゴキブリのほうが好きではある。ゴキブリは昆虫であるが、クモはそうではないという単純な理由からである。

網を張らず、家の内外を徘徊して獲物をとる種類のクモのなかで有名なものは、1995年、オーストラリアから移入された有毒のセアカゴケグモであろう。それまでは、本邦固有の徘徊性クモ類はほとんど無害であった。また現在はみることができないが、蠅(ハエ)帳をかぶせた卓袱(チャブ)台の周囲を闊歩しているハエを、忍者のような素早さで捕獲するハエトリグモがいて、感動して観察していた小児のころを思い出す。

一方、蝶にとって最大の天敵はハナグモであろう。かつて石垣島でセンダングサの白い花にとまっているイシガキチョウを撮ったが、翅を上げたまま、まったく動かないのに気づいた。みると全身乳白色のクモが蝶の体に付着して捕食している。色といい、大きさといい、センダングサの花弁とそっくりである。クモは網を張らず、白い花の上で、吸蜜に来る蝶を待ち伏せしていたのだ。叩き落としてよくみると体は扁平で、4対の脚のうち3対が前方に向いていて、カニに似ている。カニグモ科の1つで、アズチグモ属のオキナワアズチグモであろうか。

以後、注意してセンダングサをみると、花の上に微動だにしない、いわゆるハナグモを少なからず発見した。また大型のアオスジアゲハや、交尾中のナミエシロチョウが捕食されている状態もカメラに収めた。

白いアズチグモ、緑色のワカバグモ(葉上にいる)、ハナグモを含むカニグモ科の仲間は待ち伏せ型で、蝶のほか、アリ、ミツバチ、ハナアブなどを餌とする。ハエトリグモと違って動き廻らない。ハナアブは自分の体形に合わせるためか、キク科植物を好む。本邦には25属62種のカニグモがいる。

日本人は昆虫に名前(和名)をつけるのが上手である。欧米では細かい種名がなく、むしろ学名(ラテン語)が通用する。クモの名前も同様に、背赤後家、樺木小町、女郎、卯月子守、浴衣山城等々、色気があって面白い。

西山茂夫